

日本人の、日本人による、日本人のため にならない捏造——VI

中国の旅——2 南京大虐殺

よくまあ、いくらでも捏造のタネが尽きないなあ后感心するが、それだけ日本は戦争中資源の確保にアジアのあちこちを探し回っていたということでもある。ところが朝日新聞は、東京電力福島第一原子力発電所においても、わざわざ「読み取り間違い」をして「誤報」と言い逃れするが、結局は謝罪した。軍に関しては「捏造」しなければ紙面が埋まらない。それだけ記者の取材能力がおちている。それで、旧日本軍兵士を捏造で貶めて何を言いたいのか、何をしたいのか？ 東電の場合も「誤報」と言い繕っているが、意図的な誤報を「捏造」というのです。

軍関係では「人権派弁護士」なるものが一緒になってうろうろしている。彼らには、金儲けになる、という「大義名分」がある。真実なんか、どうでもいい、金儲けには換えられない。

それにしても、北清事変で、支那人たちからも信頼を集め、各国の大使館員や領事館員たちからも絶大な信頼を一身に受け、略奪暴虐の限りをつくした他国の規律のなさと比較して、その剛強かつ清廉な仕事に対し世界にその名を轟かせた柴五郎中佐率いる日本兵が、30年もたてば、一部には本来集団生活に適応出来ないものがあるだろうが、組織立って(朝日が書くような)卑劣で残忍な虐待をするようになるとは、ボクには考えにくいのだ。日本兵には、規律正しさとともに武士道精神が脈々と流れていたように思う。わずか30年で、瓦解するような脆弱な精神構造には思えないのである。……ところがどうもそうでもないらしい、という事実が存在するらしい。

大東亜戦争開始直後、イギリスの誇る軍艦プリンス・オブ・ウェールズの爆撃機のみによる撃沈に際し、「ワレノ任務ハ完了セリ。救助ヲ続行サレタシ」と打電した日本軍である。やはり変質したわけでもなさそうに思える。ただ、生命のやりとりという極限に至ったときの精神構造はまた異なったものになる可能性は否定できないし、ここに日本に我が物顔で君臨してきた軍、とくに陸軍の驕りが存在する。少しも進歩しない軍や武器がいくらでもある。これは国民の問題でもある。「聯合艦隊解散の辞」にすでに指摘されている。さらには、中国人に対する蔑視がある可能性がある。

3. 南京

3-1 百人斬り競争 これは明らかな捏造である。

1937年（昭和12年）、南京攻略に向かう途中、どちらが先に敵を日本刀で100人斬れるか、2人の日本軍将校が殺人ゲームを始めた、というもので、東京日日新聞（現毎日新聞）に4回にわたって掲載された。106人对105人で、さらに次の150人斬りを始めたというものである。戦後、南京の軍事法廷はこの報道を根拠に、C級戦犯として2人を死刑にした。（念のため、A級戦犯とは「平和に対する罪、B級戦犯は「通例の戦争犯罪」、C級は「人道に対する罪」で、戦前・戦中の殺害・虐待が対象）

事実上存在するはずがない競争が、今もって真偽論争が続いていること自体、日本の異様さが見て取れる。偽と認めたくない。（言ってみれば、反日、嫌日。東京裁判史観が正しいと信じきっている輩が存在するということである。GHQの思惑通りの低脳ぶりである。）そんなもん、記事を書いた浅海記者に証言させればすむことである。

弾丸が飛び交う戦場で、日本刀を振り回して敵を斬るなど時代劇ではあるまいしある話ではない。（中略）向井少尉は歩兵砲の小隊長であるから、最前線で刀を振りまわすわけがない。野田少尉にいたっては、大隊長副官であるから大隊長を離れて勝手な行動をとれるわけがない。「……如何に戦闘行動と雖もまったくなし」の申弁書にある。

ところが本多勝一は（見て来たように）「すえもの斬り」だという。根拠は、昭和18年、陸軍中尉の鶴野晋太郎の「斬首体験」とオガワという将校の「据え物14人斬り」を見たという中国人の証言。

鶴野は「体験的確信から類推して、……容易なことであつたに違いない」という。（……また中帰連か、と思ったら、そのとおりだった。）ところが鶴野は、1937年当時は18歳で、日本内地で「百人斬り競争」を新聞で読んでいたという。……これは経験からの類推とは言えないだろう。ただし、後年入隊したときに経験でもしたのだろうか。

ここに野田少尉の処刑直前の獄中日記が遺っている。浅海記者が両少尉に話を持ちかけた下りを産経紙上から抜粋する。

記者「どうです無錫から南京まで何人斬れるものか競争してみたら/記事の特ダネを探してみるんですが」

向井「そうですね無錫付近の戦斗で向井20人野田10人とするか/無錫から丹陽まで60対50/無錫から南京までの間の戦斗では向井野田共に100人/以上といふことにしたら、おい野田どう考へるか、小説だが」

野田「そんなことは実行不可能だ。武人として嘘名を売るとは乗気になれないね」

記者「百人斬り競争の武勇伝が記事に出たら花嫁さんが殺到しますぞ/ははは、写真をとりませう」

向井「ちょっと恥づかしいが記事の種がなければ気の毒です。2人の名前を借してあげま

せうか」

記者「記事は一切記者に任せてください」

このような経過を記し、「右述の如く、被告等の冗談笑話により事実無根の嘘報の出たるは全く被告等の責になるも、又記者が目撃せざるにもかかはらず筆の走るがままに興味的に記事を創作せるは一体の責任あり、貴国法廷を煩はし世人を騒がしたる罪を此処に衷心よりお詫びす」……つまりは捏造。

後日談になるが、この浅海記者は、北京に住み、娘を現地の大学に入学させている。ひとこと、あれは捏造でした、で尊い2人の生命が失われなかったはずである。

あと南京、三光政策と続くのであるが、田辺氏の「中国の旅」についての叙述は、ごく普通に読んでも「歯牙にもかけない」というか「はじめから信用できない」という感じの書き方である。

3-2 虐殺

たとえばといった感じで2人の証言を記述しておられるが、一部を引用する。

「虐殺は、大規模なものから1人~2人の単位まで、南京周辺のあらゆる場所で行われ、日本兵に見つかった婦女子は片端から強姦をうけた。紫金山でも2000人が生き埋めにされている（これはウソらしい）。こうした歴史上まれにみる惨劇が翌年2月上旬まで2ヵ月ほどつづけられ、約30万人が殺された/最も普通の殺し方は小銃による銃殺と銃剣による刺殺である。（ボクが思うに、30万人はともかく、殺害はあり得るだろう。ただし、非戦闘員ではないはず。中略）ときにはまた、逮捕した青年たちの両手足首を針金でひとつに縛り高圧線の電線にコウモリのように何人もぶら下げた。電気は停電している。こうしておいて下で火を焚き、火あぶりにして殺した。集めておいて工業用硝酸をぶっかけることもある。苦しさに七転八倒した死体の群れは、他人の皮膚と自分の皮膚が入れ替わったり、骨と肉が離れたりしていた。「水利亜化学工場」では、日本軍の強制連行に反対した労働者が、その場で腹をたち割られ、心臓と肝臓を抜き取られた。日本兵はあとで煮て食ったという。（筆者註；このあたりの発想は日本人にはないもので、中国人の発想である。）

「鬼子」たち2~3人がアシ原の中を捜しに来た。赤ん坊を抱いた母を見つけると、引きずり出してその場で強姦しようとした。母は末子を抱きしめて抵抗した。怒った日本兵は赤ん坊を母親の手からむしりとると、その面前で地面に力いっばいたたきつけた。末子は声も出ずに即死した。半狂乱になった母親が、わが子を地面から抱き上げようと腰をかがめた瞬間、日本兵はうしろから撃った。……鮮血をほとばしらせて、母は死んだ」（註；ここも日本人なら苦笑いするのみだろう。）

上の文は、「中国の旅」からの引用ではなく、高校教科書「日本史（三省堂）」の「指導書」から孫引きしたものである。こんな、ありもしない「事実」を多感な子供らに教えるのか？

引用文は、当時9歳だった子が本多記者に語った自らの体験を含めた説明の一部である。前半では30万人という数字、心臓と肝臓を取り出して煮て食べたというのだから、常識の問題として一蹴するしかない。後半は自らの体験を語ったもので、殺された女性はこの子（長男）の母親である。

これが事実かどうかは、目撃者がいないから証明しようがない。ただ疑問点を提示することはできる。

証言によると、一家8人は、1週間も経たないうちに日本軍から3回も殺人、強姦などの非道な仕打ちをうけている。一家は水上生活者で、城内に入った日本軍の惨禍をさけるため、一家は小舟で農村地帯に向かう。途中舟が浸水したため土手に上がり父親の組と母親の組との二手にわかれ、アシのしげった湿地帯にかくれる。1回目はすでに述べたとおり母親が殺される。2〜3日後、別の日本軍の一隊が父親の組を見つけると、1人の兵隊が自分の背囊をかつがせ連行してしまう。さらに2日後、残された子供たち5人が日本兵の「一団」にみつきり、13歳になる姉が強姦の対象に選ばれた。姉は日本兵に殴りかかり、一団のリーダーらしき男が軍刀を抜き、ぶった斬った。頭の中央がまっぴたつに割れていたというのである。

軍隊経験者でこの残虐な行為を肯定する人はまずいないと思う。**日本兵による強姦はたしかにあった。だが、日本軍が強姦を黙認したわけではない。**強姦は不心得者が人目を盗んですることだから、隊を組んでいる兵の間で起こることはまずないのだ。

それに一家は湿地帯にいたのだから泥だらけだろう。まして赤ん坊を殺す理由なんかありはしない。しかもこんな残酷な方法である。また一家の食料はどうなっていたのか・・・などなど。あとは常識の問題。

またこの証言者は「城内の大通りは死体と血におおわれて地獄の道と化した」と説明している。

東京裁判の判決「中国人の男女子供を無差別に殺しながら歩き回り、ついには通りに被害者の死体が散乱したほどであった」とよく似ている。・・・大通りは、脱ぎ捨てられた軍服（中国人の）や小物などが散乱していたが、死体はほとんどなかったのである。城内に入った兵なら誰でも知っていたことである。

陥落直後の12月13日朝、南京城内に入った「東京日日新聞」の佐藤振寿カメラマンの見たものは、難民区に近い通りのラーメン屋が開いていて、日本兵が10銭支払って食べ

ている姿であり、3～4日後には小さい通りだけでなく大通りにも店が開き、市民が集まる光景であった。佐藤カメラマンに、田辺氏は2回会って話を聞いたが「一体どこの道のどこか、見たこともない」「ウソっぱちである」と話は一貫していた。

30万人、100人斬り、市民無差別虐殺、強姦殺人など、この解説を書いた人たちは、学校教育者である前に、大人としての最低限の常識をもっているのか、疑問に思う。

南京に残留した勇敢な外国人は22人で、「南京安全国際委員会」（ラーベ委員会）を組織し、安全区を設定する。10万人といわれる難民の保護のためである。メンバーは、シーメンス洋行代表ラーベが委員長、YMCA書記長フィッチ、国際赤十字委員長のマギー牧師、金陵大学教授スマイス博士、ベーツ博士、医師のウィルソンらなどである。彼らから証言が得られている。

日本軍の暴虐を報告したティンパーリーは「外国人の見た日本軍の暴行」を著したが、この男は中華民国の宣伝担当である。だから、民間人殺害などの数もいい加減で、記述に信用がおけない、怪しい報告である。毎日、国際委員会に足を運んだ日本大使館の福田篤泰は、「出かけてみると、中国の青年が次から次へと駆け込んでくる！『いまだどこどこで日本の兵隊が15～16の女の子を輪姦している』あるいは『太平路何号で日本軍が集団で押し入り物をつかっている』等々。その訴えをマギー神父とかフィッチなど3～4人が、ぼくの目の前で、どんどんタイプしているのだ。『ちょっと待ってくれ。君たちは検証もせずにそれをタイプして抗議されても困る』といく度も注意した。時に私は彼らをつれて強姦や掠奪の現場に駆けつけて見ると、何もなし。住んでいる者もいない。そんな形跡もない。そういうこともいくどかあった」と回顧している。

文中のマギー神父は、国際赤十字南京委員会の委員長でもあり、東京裁判の有力な証人として出廷している。そこで2日間にわたって証言した100件以上の虐殺、暴行、強姦等について、自分で見たのはどのくらいあったのかというブルックス弁護人の質問に、「ひとりの事件だけは自分で目撃しました」と答えている。つまり、ほとんどは伝聞だったのであり、福田篤泰の回顧と平仄があっているのだ。

もうひとりの当時30歳くらいの女性の証言は、内容が変遷していることなどから証言の信憑性が疑われている。この女性は、「ウソをついていない」と裁判を起こしたのであるが、弁護人が20人ほどいて、田辺氏が驚いたという。・・・それほど「人権派弁護士」が金にしようとかちこちで蠢いているらしい。

田辺氏の「南京大虐殺」はこの程度にとどまっている。つまり、まったく信用していないことの証明みたいなものである。ただ、あとででてくる「三光政策」の部分ででてくるかもしれないが。

以下の文章は、偏りなく真実を追求する、中道派の代表とも言われる秦郁彦氏の研究された「南京事件」からの引用になる。秦氏は、現代史の第一人者であり、ボクは信用している。テレビの「朝まで生テレビ」に出演したとき、ベルリン在住のジャーナリストという梶村太一郎がパネルにして持ち出し、「強姦所」での日本兵の行為をとくとくと説明、糾弾した。この表は撫順で入手した某衛生准尉の「供述書」から集計したものだといひ、1940年から1945年にかけて41名に対し43回にわたる「強姦実績」を日時、場所、方法、対象者、年齢、人数、回数、と項目別に列挙したものであった。・・・某准尉が林茂美衛生曹長（のち准尉）であることを出演者の一人、秦郁彦日大教授が明らかにしている。放送中秦教授が「この人は強姦するとき、必ず年齢を聞いたのでしょうかね」と質問したら、満座が大爆笑に包まれ、持ち出した本人が真っ赤になって立ち往生した、という逸話の持ち主である。・・・これなど常識で考えればわかることではないか。

秦氏の「南京事件」では、**南京アトローシティー**（残虐行為の意味。殺人、略奪、強姦、放火など）と表現しているが、30万人はともかく、かなり多くの殺人と強姦事件が報告されている。

板倉由明氏は、東史郎（南京では英雄扱い）の虐殺本を否定する証明をした人だが、日本軍による暴行をいくつかに分類している。内訳は、殺人49人、傷害44人、連行390人、強姦359人、略奪その他179件となり、全体を通じて読み取れる共通の傾向は、

1. 強姦ないし強姦殺傷が主体
2. 数名単位の日本兵グループによる犯行が多いが、なかには将校もいた
3. 同一家屋への数度にわたる侵入が珍しくない
4. 上級将校や憲兵は兵の犯行を見つけると制止したが、概して効果は乏しかった
5. 外国人に対しては、多少の遠慮を示した

などである。どうやら南京の日本軍は統制力と自制心を失っており、放火や飲料水用の池を汚すなど自損的行為さえ辞さなかったことがわかる。ともあれ、ティンパーリーに引用された安全区委員会報告を信じれば、日本軍占領直後の南京は数週間にわたり夜盗集団が百鬼夜行する恐怖と無秩序の街と化したのである。

南京事件は、「まぼろし」派と「大虐殺」派およびその中間派との論争があり、常に政治がらみの話がついてまわる。田辺氏は「まぼろし派」ということになる。ところが「南京事件のまぼろし」と名づけた鈴木明の著では、百人斬りは捏造だが、殺人・強姦は認めていたりする。パール判決の田中正明も同様である。（田中は松井石根の秘書だった）

ナチスのユダヤ人に対するホロコーストに匹敵するというが（西のベルリン東の南京）、ナチスの民族淘汰を狙った大虐殺には Massacre という単語が使われる。Atrocity は、広

く殺人・略奪・強姦・放火などの残虐行為を指す言葉で、この2つはまったく意味が異なる。数多くの殺人が、日本兵によって行われた（戦闘中ではなく）ことは間違いないらしい。そのほとんどは戦闘員だった経験がある。非戦闘員は少ないが。

南京では、これが日本軍の兵士か！というようなひどいことがおこなわれたことは、多数の文献・手記・聞き取りなどから、明らかである。異人種かと思うほどである。軍紀・風紀の弛緩は、想像できないほどで、下克上（上官の指示に従わない）が頻繁にみられる。中国には、「便衣兵」が存在し、これが混乱を大きくした面もある。便衣兵とは、軍服を脱いで一般市民と区別がつかなくなり、ゲリラ活動などで日本軍が手を焼いた。この摘発が引き金になって、無辜の市民が犠牲になっていることは間違いないだろう。

もうひとつの問題は、上海から南京に至るまでに、多くの日本兵が戦死しているが、この仇討ちの意味もあつたらしい。

その上、敵地を占領した兵の常として、洋の東西を問わず、略奪・強姦がある。かつてのモンゴル軍のように、それを餌に兵士を督戦したことに似ている。さらに重要なことは、兵士のみならず、国家中枢の人間でさえ、中国人への侮蔑意識があつたことが、この種の犯罪の温床になっていたことも否定できない。そのため罪悪感をあまり感じなかった可能性がある。結果として、のちに「三光作戦」と呼ばれるようになるのだが、他の地域ではともかく、南京ではそう言われても仕方がないほどである。数字はともかく、行為は同じである。いや、もっと性質が悪いかもしれない。（兵士らによる告白が正しければ）

南京戦は、軍事作戦段階から占領統治段階に移行するはずである。

ここに上層部の失策・失政があつた。

1. 南京城内に侵入する兵力を制限し、一般市民との接触を減らし、不祥事の発生を抑制するところ、7万人も入城した。
2. 軍紀取締りの憲兵の数が圧倒的に足りない。局面では上級将校が制止したりするが、あまりにも少なすぎた。
3. 大量に生じると予想された捕虜の取り扱いに関する指針が欠けていた。（つまり考えていなかった、ないしは、即刻処刑するつもりだったのかもしれない。日本軍では、捕虜になることを潔しとしなかった。）世界中が首都攻城戦だから注目していたことについて格別の配慮をするべきところ、まったく認識に欠けていた。このあたりが、柴五郎らとの違いである。
4. 占領後の住民保護を含む軍政改革の欠如。国際難民区委員会（ラーベ委員会）を粗略に扱い、南京陥落後およそ2週間は無政府状態にしてしまった。

自活するだけの物資さえない飢えた兵の集団である。略奪せよ、と言わんばかりで

ある。

5. 城内の掃討が終わらず、治安が確立しないのに松井石根は入城式の挙行を急がせた。
(意味のない理由である)

日本兵は、上海以来、便衣兵に悩まされてきたから、疑わしい者は、すべてその日のうちに始末する方針であり、捕虜もまた「捕虜はとらぬ方針」であったという。実際、捕虜を抱えると、その拘置所や食料の問題がでてきて、ただでさえ食糧難だから無理もないが、武装解除して放免すればよかったはずである。中にはそういう司令官もいたのだが、いったん放免されて、違う兵士たちにふたたび拘束された例も多々あるらしい。そして捕虜の殺害事件が多発した。

中国通といわれた佐々木到一師団長が、占領後1週間で城内肅正委員長になったが、これによってさらに便衣兵狩りがさらに苛烈になった。便衣兵かどうかよりも、若い男子をほとんど肅清してしまった。

総司令官の松井石根は、いわゆる教育的指導をうけ、泣いて

1. 軍紀風紀の肅正
2. 支那人軽侮思想の排除
3. 国際関係の要領

を指示したが、兵士たちは従わなかったらしいことが窺われる。

ニューヨーク・タイムズの若い記者ダーディン (F.Tillman Dardin) は、彼のほとんど最初の長文原稿を送り、これが南京アトローシティ (Nanking Atrocity) を世界に告げる第一報であった。1937年(昭和12年)12月10日、南京城攻城戦が始まるに先立って、外国人ジャーナリストの多くは外交団とともに首都を去り、11日夕方には残る数人が米砲艦パネー号で脱出したので、13日の南京陥落を目撃したのは、ダーディンを含むわずか5人であった。15日日本軍の要請で南京を離れ、オアフ号に便乗して上海へ下ってきた。日本軍の検閲を避けるために、オアフ号から打電された。(パネー号は、樋端久利雄の稿で述べたように撃沈されてしまう)

「中国政府機構の瓦解と中国軍の解体のため、南京にいた多くの中国人は、日本軍の入城とともに確立されると思われた秩序と組織に、すぐにでも応じる用意があった。……」
「しかし、日本軍が占領してから2日の間に事態の見通しは一変した。大規模な略奪、婦女暴行、一般市民の虐殺、自宅からの追い立て、捕虜の集団処刑、成年男子の強制連行が、南京を恐怖の町と化してしまった。」

いくつかの実例を要約引用すると、以下、「日本軍の略奪は、市全体といってよいほどだった。建物はほとんど軒並みに日本兵に押し入れられ、それもしばしば将校のしている前でおこなわれていたし、日本兵はしばしば中国人に略奪品を運ぶことを強制した。」「多数の中国人が、妻や娘が誘拐されて強姦されたと外国人たちに報告した。外国人は助けようにも無力だった。」「記者は、上海行きの軍艦に乗船する直前、埠頭で 200 人の男子が処刑されるのを見た。殺害には 10 分間かかった。これを見物する陸兵の大群は軍艦から水兵を呼んで、この見ものに大いに興じている様子だった。」・・・・・・・・

フィッチの証言では、9 週間の間、昼も夜も日本軍の暴行は続いた。とくに最初の 2 週間がひどかった。2 月 17 日になって初めて 14 台の人力車が現れた。それまでに便衣狩り、姑娘（クーニャン）狩り、放火、略奪が続いた。12 月 19 日から、商店の 8 割、住宅の 5 割が襲われた。兵士たちは上官の言うことを聞かず、それでも叱りつける将校もいた。

ラーベがつぶさに観察したところによると、12 年 4 月から中国兵による掠奪が横行し、残ったものを 12 月から日本兵が掠奪した。日本兵の方がひどかった。あきれたけれども、ここはアジアなのだ、と納得させたと正直に言っている。

ティンパーリーは「戦争とは何か——中国における日本軍の暴虐」を著したが、上海にいた日本人要人に確かめて納得したものを公表した。中華民国の戦争宣伝が仕事だから、誇張はあるが、事実関係は基本的には間違っていないようだ。

石川達三は、「武漢作戦」をあらわしたが、その数ヶ月前に「生きている兵隊」を著した。これは、名前を変えてあるが、実在の師団のことを書き、日本軍の暴虐を曝している。330 枚のうち 80 枚は編集部が伏字にしたが、内容はよくわかるもので、起訴され禁錮 4 ヶ月執行猶予 3 年の有罪である。目的は「戦争というものの真実を国民に知らせること」。裁判長が「日本軍に対する信頼を傷つける結果にならないか」に対し、「それを傷つけようとしたのです」・・・・硬骨漢である。秦氏もほめている、というより驚いている。・・・・こうした発言自体が、卑屈なまでに時流に迎合するジャーナリストへの痛烈な皮肉になった。戦後ずいぶん経過してから、同じようなことを書いた人が幾人かいる。

南京における大残虐行為と蛮行によって、日本軍は南京の中国市民および外国人から尊敬と信頼を受けるわずかな機会を失ってしまった。上層部に国際感覚がなかったのである。これでは、せつかくの戦争の意義が、単なる侵略ととらえられても仕方がない。日清・日露戦争のときには、国際感覚がはっきりとしていて、条約改正などへの配慮が存在した。南京では、単なる暴徒と変わらない。それほど軍の規律が弛緩していた。・・・・そういう意味では、敗戦によって軍が消滅したことはよかったと思う。

山田支隊の15000人ほどの捕虜の暴動で、捕虜はほとんど殺害されたが、日本側にも被害がでている。いきさつについては諸説あり、日本軍の失態である。殺害された人数が5000～6000、2000、1000～3000人と手記によりまちまちで、1万数千や8千人との差が不明である（中国側では5万人）。この反乱が南京アトローシティで最大級の惨事である。

このとき、松井大将は「解放せよ」と言ったが、参謀の長勇が独断で「やっちなえ」と言ったと伝えられる。下克上、幕僚専制の風潮が横溢していたのがこの時期である。命令違反や捕虜殺害も、長を知る人の中では「長ならやりかねない」とうなずく人が多い。

ボクは、何かの本で「長や中島（今朝吾）はサディスティックだからなあ」というのを読んだことがある。（ちなみに長は沖縄戦で自決している）

投降兵の殺害には、戦闘の延長とみられる要素もある。リンダーバーグ大佐によると、米豪兵士が投降日本兵を殺害してしまうので、情報がとれずに困ったと書いているが、生きるか死ぬか、先程まで戦闘していたのが、突然降伏されても、精神的に昂揚しているし興奮しているから、やむを得ない面もある。

しかし、一度捕虜として受け入れ、管理責任を負った敵兵を正当な法的手続きを踏むことなしに処刑するのは、明白な国際法（交戦法規）違反行為であり、第二次大戦でも日本軍のほかにはあまり例がない。ソ連もひどいものだが。しかし、一挙に5万人もの捕虜がいたなら、それを管理し、食べ物を供給するのは大変なことで、これも一因だろう。

話を元に戻すようだが、「虐殺」の定義は、実ははっきりとはしていない。**捕虜や投降者を刺殺したり銃殺したりするのは、単なる「殺人行為」であって、虐殺とは言わない。虐殺とは、たとえばアイリス・チャンの「レイプ・オブ・南京」に記載されているような、「兵士たちはレイプしたばかりでなく、女の腹を断ち割り、胸をスライスし、生きたまま壁に釘で打ちつけた。父親たち（以下すべて複数）は自分の娘を、息子は母親をレイプするよう強制され・・・生き埋め、去勢、器官切開ばかりか、集団的に火あぶりするのも日常的シーンとなった。より悪魔的残虐行為——たとえば鉄のフックを人々の舌にひっかけて吊るすとか、腰のあたりを土に埋め、ドイツ種のシェパードに噛みつかせ、バラバラに引き裂くの見物する・・・。」**というような行為を「虐殺」と呼ぶ。（これは単なる捏造であるが、中国人の発想にはあるのかもしれない）

あるいは、本多がインタビューした人の話で、電線にぶら下げて火あぶりしたり硝酸をぶっかけたり、腹を断ち割り、肝臓と心臓を抜き取られた、などを言うのは捏造だとわかるし、残虐写真が残っているのだが国民政府のヤラセ写真だったりで、どれも捏造に過ぎ

ない。これを東中野修道氏が解説した。(2014年9月、本多勝一が一部の写真をまがい物、つまり捏造と白状した)

いずれにしても著作や手記の都合のいい部分だけを取り上げ、あたかもそれがすべてであるかのように主張するのは、世の常である。前述のラーベは、無統制の敗残兵と化した便衣兵が、略奪、放火、レイプなどを行ったことも見逃さず、部下を放り出して逃亡したり、難民区に潜入したりした中国軍幹部がいたことも指摘している。

心ある指揮官たち、とくに中小隊長は、兵士たちが飢える寸前に追い詰められる段階まで徴発(略奪)を許そうとしなかった。のちに「軍神」と呼ばれた西住小次郎中尉は絶対に部下の略奪を許さず、まれに他の隊の兵士の事例を発見すると、監視兵をつけて返却に行かせた。これは例外的である。(食糧事情にも恵まれていたらしいが)

レイプは、法律用語では「強姦」であるが、一般には暴行を意味する。姑娘狩りが頻繁にみられ、強姦は占領兵の権利のような感覚があったのは、古今東西を問わないが、略奪・強姦は軍の常だ、と嘯く中島師団長まででる始末である。のちに東京裁判の弁護をおこなった滝川政次郎氏は北京にいたのだが、南京の話聞いて訪れたところ、車夫から「南京にいるクーニャンで兵から暴行を受けなかったものはひとりもない」と聞かされて仰天した体験を書いているが、話半分としても、ラーベの指摘する2万人強姦説は正鵠を射ているかもしれない。ひどいものになると、住宅で数人の兵が数人の女性を強姦していた例もあり、さすがに軍法会議にかけられたのもいる。この事件の主犯が天野郷三弁護士で、戦後20年近く弁護士を開業していたという。あんまり多いので、急遽慰安婦を募集したが、恥ずかしいことに、それでも強姦はなくならなかった。強姦は禁止されていたから、証拠隠滅のために殺害して放火をしてしまう。恥を恥と思わなくなった昨今の世情も仕方ないのかもしれない。

「近頃徒然なるままに罪もない支那人を捕まえて来ては生きてまま土葬したり、火の中に突きこんだり木片で叩き殺したり」とか「今日もまた罪のないニーヤ(中国人のことか)を突き倒したり打ったりして半殺しにしたのを壕の中に入れて頭から火をつけてなぶり殺しにする。退屈まぎれにみな面白がってやるのであるが、・・・まるで犬や猫を殺すくらいのもんだ。これでたたらなかったら、因果関係とか何とか云うものはトントンで無有と云うことになる」

「徒然なるままに」とか「退屈まぎれに」とか、しかも従来ボクが主張してきた「日本人の発想にはない」ようなことをしている。まさに鬼畜の所業で、ソ連兵でもここまではしないだろう。(そうでもないけど。)同じ国民のひとりとして恥じるほかない。どんな強

弁をもってしても、これを正当化する論理は構成できないだろう、とは秦氏の言い分。

第二次大戦でのソ連兵でも、殺人にまで至った例は少ないようである。(これに対しては賛成できない。)・・・で、秦氏はこのような例はごく限られた例外的なものだと考えておられたらしいのだが、どうもそうでもないらしく、数多い参加兵士の報告が届いているという。(事実を書いているとすれば、だが。しばしば、自ら経験したことの無いことを誇張して報告する連中がいるし、与太話を得々と語るのもいるから、全てを信用できないが)

だから、「南京大虐殺」というのは、「虐殺」は捏造である。だが、「殺人行為はあった」のは間違いはないが、誇張がありすぎるから「改竄」のほうが言葉としては、より正確なのではないか。ただし、証拠となるものは何一つない。30万人というのは明らかな捏造である。坂井三郎氏は、南京陥落後には移動しているから、1500人しか残っていないのに、30万人もどうやって殺すのだ、と述べておられる。

被害者の数についても諸説あり、10万人以上と推定するのが9人(いわゆる反日ないし朝日新聞系、笠原十九司ら)、1～3万人という人が6人(板倉由明、櫻井よし子、田辺敏雄、中村繁)、数千人以下というのが3人、限りなく0に近いと言う者が7人(これがいわゆるまぼろし派で阿羅健一、東中野修道ら)、秦氏の計算では、4万人前後になる。30万人は誇大に過ぎるという結論であった。あるいは、数千人単位かもしれない。

虐殺の定義がいまだにはっきりとはしないのであるが、「虐殺」という以外に表現できないものから、戦闘に伴う殺害まで含まれるらしい。むしろ日本人から出た言葉ではなく、中国側から出てきた表現のような気がする。・・・日本では「虐殺」という表現で表される事件など、歴史的にみてもほとんどないのではないか。徹底的に攻撃した、たとえば、織田信長の長島一向一揆や比叡山焼き討ちくらいであるが、中国の言う虐殺ではない。

今年(2014年)、中国が国際連盟で1938年2月に「南京の死者は2万人」と演説していた事実が発掘された。(戦闘員も民間人も含めてだが) 秦氏も新資料だろう、という。

今となっては、まったく被害者数がわからないし、月日の経過とともによりわからなくなるだろう。ただ、少なくとも、0ではないのは確実なようだ。日本人にあるまじき行為を犯した連中が戦後もそれぞれの分野で、「正常人」にもどって生活している。農家の人間だったり、商人だったり。そういう人々が一時的に狂って蛮行に及んだにしても、戦後ごく普通に生きてきたのは、なぜか納得できない気がする。・・・今、特別攻撃隊の話を読んでいるから余計にそう思われる。

2014.09.11.